

とにかく楽しいんで、この仕事は

語り手 高畠大地（高校一期生 メディア出版系） 聞き手 木村叶大

「やりたいことと、やりたくないことがわかった」

— こんちは。早速、聞き書きを始めていくのですが、まずはこの企画にご参加いただき、ありがとうございます。

— とんでもないです。

— では最初に軽い自己紹介から始めます。改めまして、木村叶大です。高校三年生です。趣味は、ギター弾いたり野球観戦をしたり、幅広くです。よろしくお願いします。

— あれ、部活はやめたみたいなこと、言っていましたっけ？

— そうですね。自分は中学からこの学校に通っていて、中一から高二までバドミントン部に入っていましたね。

— バドミントン部って僕らの時代はなかったけど、いつからできたんですかね。

— どうなのでしょう。その頃は、どんな部活があったんですか？

— 一期生やったから、めっちゃくちゃ少なかったですね。自分はアメフト部やったけど、それは今もすっかり残ってますしね。

— それは、アメフト部に入る目的で、この学校に入られたんですか？

— 全然、入るつもりはなくて。けど、あまりにも部活が少なくて、その時ハマってた漫画に影響されて入ったって感じですね（笑）。

— そうなんですね。じゃあ、この学校に入ったきっかけは何だったんですか？

— きっかけは、今の職業に関係するんだけど、自分は映画がめっちゃ好

きで。映像業界とかで仕事したいって思っていて、ちょうど立命館大学に映像学部ができるって聞いて、その関係で立守に決めましたね。

— なるほど、大学の学部から選んだんですね。

— そうなんですよ。

— 実は、自分も映像関係の仕事に就きたいと思っていて、まさしく映像学部を目指しているんですよ。

— そうなんです！ 七月やったら、まだ決まっていなくてすよね？

— そうですね。確定するのは秋、冬くらいですね。今は成績関係のことに追われていますね。

— あれ怖いよねー。

— そうなんですよ。成績の順位がちょうど最近出たばかりで。

— 僕の時もあったわー。なんで映像学部目指してるんですか？

— きっかけは二年前くらいなんですけど、King Gnu というアーティストが大好きで。そのミュージックビデオとかが本当にすごく。いつの間にか、そういう映像を作ってるクリエイティブチームの方にも憧れ持つようになったんですよ。自分も映像通して、人の心動かしたいなって思っ

て。すごいですね。自分はふんわり映像関係に就きたいくらいしか考えていなかったから。頑張ってるね。

— ありがとうございます。高畠さんは今、テレビ東京で働いていらっしやるんですっけ？

— テレ東の番組もやっていますけど、自分は制作会社に入っています。テレビ局の番組って、ほとんど制作会社で作ってるんですよ。だから、テレビ東以外にも、Abema の番組とか、Youtube の動画制作とかもしていますね。

—すご。そうなんです。何か、映像業界を目指していた時と今を比べて、どんな違いとがありますか？

目指してた時は、今作ってるようなバラエティを担当するとは思ってなくて。なんなら、昔は映画関係を目指してたんで。けど、就職活動するときに、自分はテレビっ子で、人を笑かすことが好きで、バラエティに進みましたね。だからどっちかという、大学とかで勉強してきたことより、友達とワーキー楽しんでいたことの方が、今やってることに近い気がするな。

—でもそれは結果として、いい方向に進んでますもんね。

いや絶対。僕はCGとか興味あったけど、大学でやってみて性格に合っていないって気づいたね。とか、映画撮影みたいな授業でも、自分はカメラマンをしている時に、監督から命令されたり。監督っていうだけで命令されんのか、全然やりたいことと違うって思ったな。だから逆に、映像学部に入ってよかったなという。自分のやりたいこととやりたくないことがわかったことはよかったな。

—確かに、別の学部行ったら、実際仕事に就いて失敗していたかもですもんね。

ほんまにそうやわ。

—高畠さんが、映像学部に通ってた頃は、どこのキャンパスだったんですか？

元々京都でしたね。

—そうなんです。今は大阪の茨木にあるんですよ。結構設備とか整えてるらしくて。

金かけてるから。その分、面白い経験積めると思うよ。なんか勉強って感じではなかった。

—なんか結構辞める人も多いみたい。それがちよつと不安なんです。ね。

まあ、映像を勉強したいっていうやつが全国から集まるからね。他の学部は学ぶことが、もうちよつとふわつとしてるから。やから、滑り止めできてる人とかは、思ってたのと違うって辞めちゃう人も多いと思う。あと、癖の強めな人が多いからね。面白いけどそれも。

—自分は、映像一本！って感じの覚悟はできてるんですけど、まだ専門的な知識とか技術がなくて。これまで映像編集とかに力入れてきた人と戦うことになるんじゃないかなと。

うん。でも僕も全然ですよ。その時知識とか技術は。

—そうなんです。馴染めるかも心配ですね。

僕も全く馴染んでなくて、別に友達作りも頑張らなかったな。自分は、ダンスをずっとやってたから、ダンスサークルで楽しんだな。

—サークルで友達もできますもんね。授業のチーム課題とかはどうしていたんですか？

そうそう。でも映像学部の人って、真面目な人が多いから、みんなめっちゃ優しい。それで僕が浮いてると思ったら、向こうから話しかけてきてくれたり。

—高校の頃はやんちゃだったんですか？

そんなやんちゃではなかったと思うけど、とにかく人を笑わせることが好きで、目立ちたがりやだったから。全然不良ではなかったかな。まあ、普通の真面目な子ではなかった気がするけど（笑）。

—その当時の雰囲気は、今も残ってるんですか？

—どうなんです。でも、バラエティ番組のスタッフって、みんな目立ちたがり、とにかく面白いこと考えたいから、残ってるかな。僕が

この業界に入った時の、離職率が七割って言われて。面白いことが好きじゃない人はしんどくて辞めちゃうことが多いから。けど、自分は全然辞めたいって思ったことないですね。

—それくらい面白いことが好きなんです。この業界に入って今、何年目になるんですか？

十三年目かな。

—最近、テレビ離れてよく言いますが、十三年で変わったことはあるんですか？

これよく聞かれるんだけど、意外と仕事的にはそんなことなく。もちろん、テレビを見ない人は増えてるけど、そういう人はサブスクとかで見るから、逆に仕事が増えてるというか、同じく幅が広がってるから、そんな影響はないですね。それでも、まだまだテレビの力は凄くて、業界的にもうやばいぞとはならないな。

—そうなんです。意外でした。

そうなんです。今はサブスクとかの差別化を意識してたり、コンプライアンスが厳しくなったからね。そこら辺はだいぶ変わったかな。

—そんなに変わってるんですね。実は、僕は生粋のテレビっ子なんです。

珍しいね。

—そうなんです。YouTubeとかもほぼ見なくて。バラエティばかり見ますよ。好きな番組は、水曜日のダウンタウンとかですね。

水曜日ね。

—華大さんと千鳥くんとかもですね。

—で。どっちも知り合いが多いんですよ。

—え、すご！

水曜日とかは、見たくないくらいすごいですよ。業界のすごい人が集まって作ってるなっていう。同じ業界やからこそ見えちゃうんですけど、よくその内容がクリアして放送されているとか、嫌になるくらいすごいですよ。

—一番嫉妬した説とかあるんですか？

いや、ほんまに全部すごいですよ。

—電気椅子の企画もすごかったですよね。

—いや、すごい。普通の番組が思いつくゲームの何個も上を行ってるというか、全部がすごいね。

—やっぱ、高島さんが思うトップの番組は水曜日なんですか？

—なんかそれでいうと、ジャンルがいっぱいあるじゃないですか。自分の会社は他人を傷つけない笑いを大事にしている、演者さんが面白いって感じてもらえることを心がけているんですよ。その観点で見ると、水曜日は全く違って。誰かを陥れて面白いつてなる笑い、あれはもちろん面白いんですけど、僕らの会社ではあれをすることはできないんですよ。だから、僕の中でトップなもので言うと、内村プロデュースっていう番組かな。それは、うちの会社が昔作っていたやつで。やから、木村君も、映像の業界入る時は、そういう自分の好みにあったところで決めるほうがいいやろうなって凄く思う。バラエティ関係なく。入って違うなって感じて辞める人も多いし。そんな感じで、就職活動の時に、こっち側が見るのはそういうところな気がするな。

—なるほど。やっぱ辞める人は多いんですね。

—そう。だから、King Gnuっていうわかりやすい目標で、それに関わってるチームを選ぶってのもいいと思うけど、憧れるクリエイターとか、過去の作品がすごく影響受けたとか、そういう観点で選んでもいい

い。事前に自分と波長が合うとか見といたほうがいいなって思う。

—そういう観点とかも、映像学部で絞れるかもですね。

うん。木村君がやりたいのは、映像ディレクターみたいなことなんかな。

—なんか、この作業したいっていうのは特にまだ想像がついてなくてわかるわ。

—まだ見る側しか体験してないから、作る立場になった時のことがわからないですね。

—なんか違うもんね。僕も会社入った時、ディレクターとプロデューサーの違いとか言えなかったもん。

—ですよ。だいたい裏表ある仕事かなって思います。

—うんだいぶ違う。ちよっと違うだけで、自分のやりたいこととズレるし。

—自分は企画することが好きなんですよね。さっき言いそびれたんですけど、脱出ゲームも趣味の一つで。それを高校生活の中で、企画とか制作をしていたんですよ。

めちやくちや流行ってるよね。

—そうなんです。元々将来、そういうイベントを企画したいなって思っていて。でも、企画していく中で、別に脱出ゲームっていうイベントに限らなくていいなと思って。

まあね。確かに。

—企画することが好きで、脱出ゲームを作ることが中心にあるわけではないなってことに気づいて。

素晴らしい。

—脱出ゲームって物語とか、ゲームの設定が全部にあって、その物語性

とかを構成するのに楽しさを感じてるなと思って。それをぼんやり考えていたら、King Gunの映像に出会って、これや！ってなりました。

それは素晴らしい。いや、それ気付けてない人めっちゃ多いんですよ。就職活動とかで、こういう番組を作るのが夢なんですっていう人結構多いんですけど、それが叶ったかどうかどうするのってなるじゃないですか。とか、それが一個目で叶ったらとか。やから、現地点で気付けてる木村君はすごいですよ。

—おー。よかったです。

—そうそう。僕、アイドルさんとかとも仕事してて、ライブの仕事とかもするんですけど、ライブの演出チームはそういう企画運営チームやから、企画を考えることとKing Gunはもしかしたらつながるかもやね。

—けど、自分ミハー氣質で。映像学部に通ってる途中で、やりたいことが変わったらって思うと、不安なんですよ。

全然いいんじゃないすか。

—周りに、方向性が変わった人とかいましたか？

—全然いた。なんなら、映像関係行った人とか半分くらいやと思いますよ。

—そうなんです。

—うん。だから無理しなくていいと思いますよ。無理して、映像関係に進むのも、逆に自分の首を絞めることになると思う。

—確かにそうですね。

—うん。そういう意味で言うと、映像はいいと思いますけど。専門的ではあるけど、就職で全く関係ない業界でもちよっと食いついてもらえと思うしね。

—確かに、珍しいですもんね。急ですけど、話変えてもいいですか？僕

の人生相談ばっかりしてしまっているの（笑）。

全然。

―最近、学校の校則がめっちゃ変わったんですよ。知ってますか？
全く知らない。

―一気に変わって、髪染め、ピアスとか全般が許されるようになったんですよね。

マジで。木村君の周りも髪染めしようぜとかなってるんですか？

―ちよこちよこ出てきてるくらいですかね。ピアスとか。

金髪とかいるんですか？

―いますよ。

えーすご。

―憧れありました？ ピアスしたいとか。

でも、校則が厳しいなと思ったことはないな。まあでもあの先生らの前で髪染めとかピアスはできひんな。なんか、面白い学校ですね。

―ちよつと変ですね（笑）。

「とにかく楽しい」

―この業界に入って、辞めたいなと思ったことはないんですか？

根本的に辞めようとは思ってないとか、とにかく楽しんで、この仕事は。この仕事っていうか、バラエティ制作は。会議でも、収録現場でも、ずつと笑ってるんですよ。

―そんな楽しい仕事できて、最高ですね！

そうなんです。でも、ずつと笑ってるけど、全然寝れてないから、お笑いが好きじゃないと、多分頭がおかしくなるやろうなって思いますね。

―好きだからこそ続けていけるんですね。ちなみに、映画が好きとおっしゃられていましたが、映画を作りたいという願望は無いんですか？

ないかな。たまに、ドラマとかミュージックビデオの制作現場に関わることがあるんだけど、やっぱり自分のやりたいことは全く違うから、面白くないんですね。

―やっぱりお笑いが好きなんですね。

好きですねー。

―業界の中で憧れの人とかはいらっしゃいますか？

めっちゃいますよ。それこそ水曜日のダウンタウンの演出、要は映画監督みたいな人なんですけど、Iさんっていう人は天才ですね。あの人に追いつくのは無理かもなっていうぐらい。でもやっぱり、経験って大事やなって思わされるというか。尊敬する人はみんなすごいですね。

―自分はバイトで脱出ゲームの店舗で働いているんですけど、裏側に行ったら、世界観が逆転してしまいました。だから、好きなことを仕事にする怖さっていうのも感じてますね。

確かに。映像業界でも入ってがっかりしちゃう人多いですね。僕は逆に、裏側すげえってなりましたね。

―僕もそうなりたいですね。

まあでも映像業界は、仕事と趣味がニアリーイコールなところやから、そんな大丈夫な気がするけど。

―がっかりしても、そこで新しい楽しさを見つければいいですよ。

うん。あと、映像学部に入ったら、映像に関するものやったら何作ってもいいっていう授業があるんですよ。自分は、生活音で音楽を作ったんですけど。全く面白くないし、なんで作ったんやろみたいな。まあ、そういう機会が多いから、自分のセンスとか向いてないなって気づく場

面があるんですよ。

―生活音で音楽作るなんて、聞いてるだけでめちゃくちゃセンスありそうですね。

いやいや全然でした。まあでも、先生からの評価とかは全然良くて、初めて本気で作ってみたっていう経験にもなるし、いい授業やと思うよ。

―映像作品って受け取り側の価値観が変わりますもんね。

そうね。意外と入ってみたら、結構楽しいと思うから、頑張ってね。―はい！ 頑張ります！

【感想】今回の取材を通して、立命館守山高校の昔と今の変化や、卒業生がどのような生活を送っているのか、聞き書きでしか知り得ないことが知れてよかったです。また、自分が目指している業界の方に、たくさん話を聞いたことで、さらにその業界を目指す活力が生まれました。

（聞き書きはオンラインで実施、写真は後日東京でお会いたした時）



右：語り手 高島大地さん 左：聞き手 木村叶大